



|                                                                                        |                                                                                                                                                                           |
|----------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|  Data | 2024-64                                                                                                                                                                   |
| 監督:                                                                                    | キム・ソンス                                                                                                                                                                    |
| 脚本:                                                                                    | ホン・ウオンチャン / イ・ヨ<br>ンジュン / キム・ソンス                                                                                                                                          |
| 出演:                                                                                    | ファン・ジョンミン / チョ<br>ン・ウソン / イ・ソンミン /<br>パク・ヘジュン / キム・ソ<br>ンギョン / チョン・マンシ<br>ク / チョン・ヘイン / イ・<br>ジュニョク / チョン・ドンフ<br>ァン / キム・ウィソン / ユ・<br>ソンジュ / アン・ネサン / チ<br>ェ・ビョンモ / パク・フン |

## みどころ

日本の戦後史は、アメリカ占領下での平和憲法制定⇒サンフランシスコ講和条約（51 年）⇒日米安保条約（60 年）という大きな流れの中における自民党を中心とする議会制民主主義の継続だった。しかし、お隣の国、韓国は「日帝」を追放した後、朝鮮戦争（50 年～53 年）を経て、南北分断の悲劇の下で何とか民主主義の体裁を保ってきたが、そこにはさまざまな軍事クーデターによる軍事政権が登場したから、日本とは大違いだ。

また、日本では 2022 年 7 月 8 日に起きた安倍晋三元首相の銃撃事件は稀な事例だが、韓国では大統領の暗殺事件もたびたび発生！しかして、1979 年に起きた 12.12 軍事クーデターとは？

李承晩、朴正熙、金大中らの大統領経験者の名前は日本でも有名だが、本作に見るチョン・ドゥガン保安司令官（悪玉）vs イ・テシン首都警備司令官（善玉）の対決を知っている人は少ないだろう。韓国でも、この 12.12 軍事クーデターを真正面からテーマにした映画は本作が初めてだから、「実話をモチーフにしたフィクション」たる本作から、12.12 軍事クーデターと韓国の戦後史をしっかりと学習したい。

## ■この手の韓国映画は必見！民主主義の勉強をしっかりと！■

あなたは 1979 年 12 月 12 日に韓国で起きた軍事クーデターを知ってる？1945 年 8 月 15 日の敗戦後アメリカの占領下で平和憲法が制定され、1960 年以降は日米安保条約の下で、今日まで平和と安全が守られてきた日本では、自衛隊による軍事クーデターはおろか、政権交代すらともに機能することなく、自民党を中心とする政党政治と民主主義が続いてきた。日本の今の若者にとってはそれが常態（ノーマル）だろうが、世界を見ても、ア

ジアを見ても、それは異例のものだ。

カンボジア、タイ、ラオス、フィリピン等々の例は、日本にはあまりなじみがないが、朝鮮戦争（1950 年～1953 年）終了後、南北に分断されたお隣の国、韓国では、李承晩が 1948 年 8 月 15 日にアメリカ後援の下に、朝鮮半島南部のみを実効支配する大韓民国政府の樹立を宣言し、李承晩が議会多数の支持を得て初代大統領に就任した。その後、1952 年 1 月 18 日に“李承晩ライン”を宣言したことで日本でも有名な李承晩は、議会と対立しながらも権力の独占化を進め、大統領の直接選挙制や任期の三選禁止を撤廃する改憲を断行した。そして、1956 年には三選を果たしたが、1960 年の四選を狙った大統領選挙ではついに失脚し、アメリカに亡命した。

他方、李承晩失脚後の政治的混乱を、1961 年 5 月 16 日の軍事クーデターを成功させたことによって、新たな軍事政権を打ち立てたのが朴正熙だ。朴正熙少将は陸士 8 期生の佐官級将校 9 名の中心となって「5.16 軍事クーデター」を断行し、軍事革命委員会の副議長を経た後、1963 年～1979 年まで（第 5 代～第 9 代）大統領に就任した。そんな朴正熙は、1974 年 8 月 15 日に暗殺未遂事件にさらされた上、1979 年 10 月 26 日には現実に暗殺されてしまったから、ビックリ！その暗殺事件をテーマとした映画が『KCIA 南山の部長たち』（20 年）（『シネマ 48』226 頁）だった。ちなみに、そんな朴正熙の独裁時代の真っ只中に起きた稀有な事件が、野党指導者金大中が日本で拉致された金大中事件であり、それをテーマにした映画が『KT』（02 年）（『シネマ 2』211 頁）だった。

しかして、独裁者・朴正熙を暗殺したのは一体誰？それを調査すべく、暗殺された日に捜査を指揮する合同捜査本部の本部長にチョン・ドゥグアン保安司令官（ファン・ジョンミン）が任命されたが、彼こそ朴正熙と同じように、軍事クーデターの成功から大統領に就任した男だ。そんな男が 1979 年 12 月 12 日に起こした軍事クーデターは日本でも有名だが、なぜかこの 12.12 事件は韓国でも映画化されていなかった。それが今般、キム・ソンス監督によって映画化されることになったから、この手の韓国映画は必見！ちなみに、1980 年 5 月 18 日に起きた光州事件は、『光州 5・18』（『シネマ 19』78 頁）として 2007 年映画化されているから、本作を鑑賞した後は、前記『KCIA 南山の部長たち』と共に『光州 5・18』も鑑賞し、しっかり韓国の現代史（戦後史）と民主主義のあり方を勉強したい。

## ■□■実話をモチーフにしたフィクション！名前はすべて架空■□■

他方、朴正熙大統領の暗殺を受けて当然のように戒厳令が発令されたが、チェ・ハンギョ大統領（チョン・ドンファン）から戒厳司令官に任命されたのは、陸軍参謀総長の地位にあるチョン・サンホ（イ・ソンミン）。そのチョン・サンホは、合同捜査本部長にチョン・ドゥグアンを任命したものの、チョン・ドゥグアンが“ハナ会”という秘密結社を作り、そのボスとして君臨していることを快く思っていなかったため、首都警備司令官には何としてもチョン・ドゥグアンやハナ会の影響を受けず、国と国民を守るという軍人本来の使命に忠実な男イ・デシン（チョン・ウソン）を任命したいと念願していた。チョン・サン

ホからそんな話を聞いたイ・テシンは「自分はそんな地位に値する軍人ではない」と頑なに断り続けたが、刻一刻とチョン・ドゥグアンへの権力集中が強まる中、ついにイ・テシンはチョン・サンホからの首都警備司令官への就任要請を受け入れることに。

したがって、1979年10月26日に起きた朴正熙暗殺事件が冒頭で手短に紹介された後、本作の主人公として登場するのは、チョン・ドゥグアンとイ・テシン、そしてイ・テシンを首都警備司令官の要職に就任させようと尽力する陸軍参謀総長のチョン・サンホの3人となる。「本作は実話をモチーフにしたフィクションである」と強調された本作では、この3人は上記の通りの仮名だが、モチーフとされた実話では、チョン・ドゥグアン＝全斗煥（チョン・ドゥファン）、イ・テシン＝張泰玩（チャン・テワン）、チョン・サンホ＝鄭昇和（チョン・スンファ）だから、その点の確認をしっかりと。

さらに、本作後半に、チョン・ドゥグアンから執拗にチョン・サンホの逮捕を裁可する旨の書類への署名を要請されるのはノ・テゴン大統領（パク・ヘジュン）だが、モチーフとされた実話では、これは盧泰愚（ノ・テウ）大統領だ。

## ■政治と軍事は別！その原則の遵守は？日本は？韓国は？■

近代民主主義の原則では、政治と軍事は別。つまり政治のトップは軍人ではなく、文民であり、軍人は政治に関与してはならず、文民統制の下にあるというものだ。

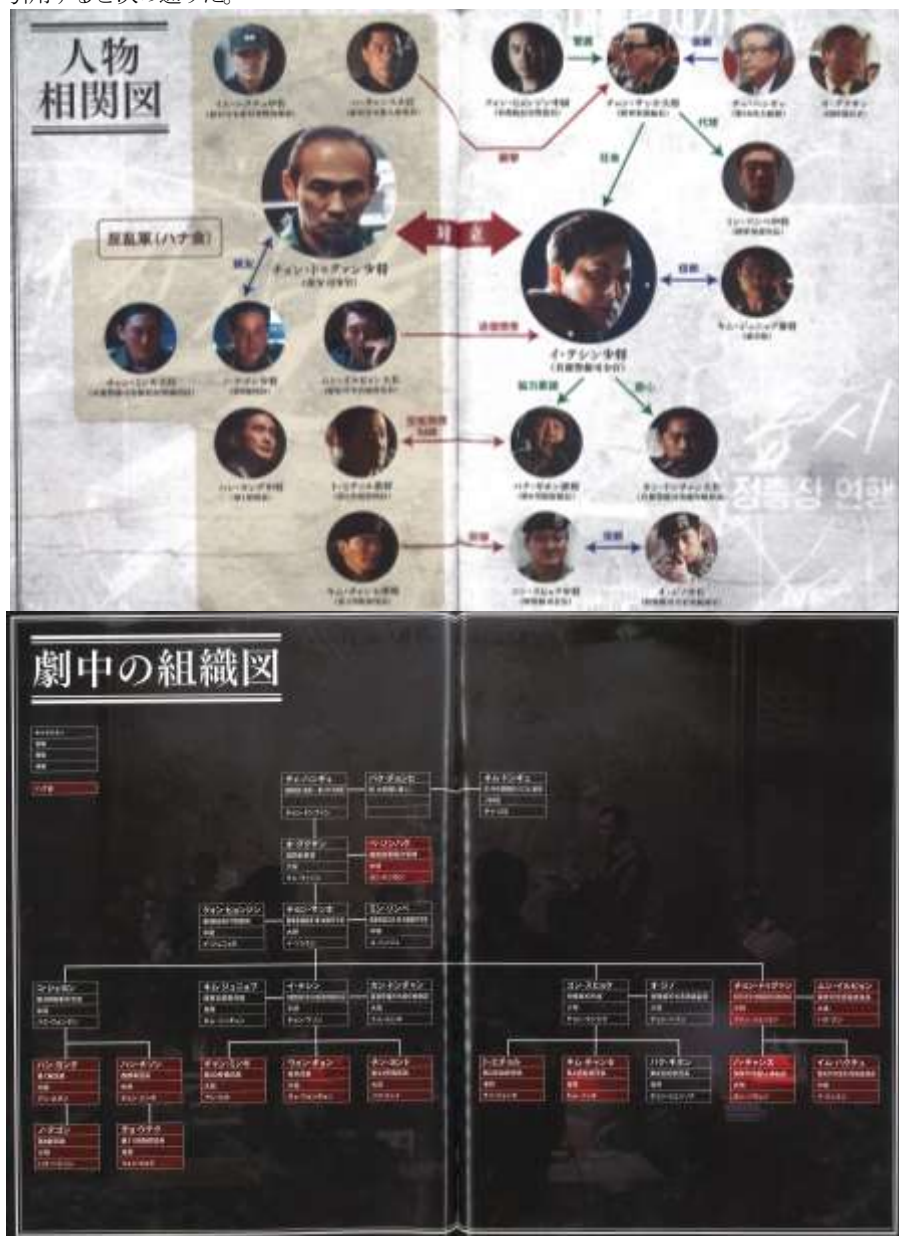
この文民統制の原則は、1945年8月15日の敗戦後、アメリカ式の民主主義を受け入れた日本ではとりわけ顕著だが、実は戦前の明治憲法下でも、文民統制の原則は存在し、折に触れて強調されていた。しかし、戦前には“天皇大権”とか“天皇の統帥権”の問題があったし、内閣の中には陸軍大臣（陸軍省）と海軍大臣（海軍省）が存在し、人的にも物的（予算的）にも、それぞれ大きな力を持っていたから、「内閣一致の方針」を貫くためには陸海両大臣の了解が不可欠だという大きな問題があった。

日本は1932年の五・一五事件による犬養毅首相の暗殺事件の後、議会制民主主義が形骸化し、事実上軍政に移行した。ところが、陸軍内部では統制派と皇道派の対立が激化し、農村部出身の青年将校の間では「昭和維新、尊皇斬奸」のスローガンが広がった。その結果、1936年2月26日には二・二六事件が発生し、政府要人を襲撃するとともに永田町や霞が関などの一帯を占拠したが、天皇が彼らを“叛乱軍”と見なしたため、この軍事クーデターは不発に終わった。戦後の私の記憶に生々しいところでは、1970年11月25日に起きた三島由紀夫の割腹事件があるが、あれは軍事クーデターにはほど遠いものだった。

このように平和憲法に守られた日本では、戦争はもとより軍事クーデターにも無縁な状況が続いているが、アジア諸国では残念ながらそれが頻発している。そして、何を隠そう、韓国はその先行列だ。1953年に朝鮮戦争が停戦し、南北分断という悲しい状況に至った韓国は、1948年に初代大統領李承晩が誕生し、1963年には朴正熙が大統領に就任したが、彼らはいずれも軍事クーデターを経た上での大統領への就任であることに要注目！

政治と軍事は別、文民統制の原則を理解するためには、そもそも大統領制と議院内閣制

はどこがどう違うのかという根本問題や、軍隊を保有した場合のその組織体制（組織図）をしっかりと理解することが不可欠だ。そこで、パンフレットにある人物相関図と組織図を引用すると次の通りだ。



パンフレットには、「本作は実話をモチーフにしたフィクションである」と書かれているが、史実をエンタメ作品としてではなく、実話をモチーフにしたフィクションとして本作を楽しむためには、それらをしっかり勉強する必要がある。

## ■人事を巡る三人三様の思惑は？■

チョン・サンホ陸軍参謀総長が、1979年10月26日の朴正熙大統領暗殺事件の現場に居合わせていたのは事実らしい。しかし、本作では、彼の暗殺事件への関与の可能性はゼロであり、事件後直ちに彼はチェ・ハンギュ大統領からの任命を受けて戒厳司令官に就任した、とされている。他方、10.26朴正熙大統領暗殺事件の捜査を担当する合同捜査本部長に保安司令官たるチョン・ドゥグアンを任命したのも、戒厳司令官にして陸軍参謀総長たるチョン・サンホだ。

他方、チョン・ドゥグアンの地位は参謀総長より下位の保安司令官だったが、暗殺事件の合同捜査本部長を兼ねていたため、すべての情報網を握っていたのはこのチョン・ドゥグアンだった。そのため、チョン・サンホがイ・テシンを首都警備司令官に起用することによって自分に対抗させようとする姿勢を示すと、チョン・ドゥグアンはチョン・サンホを追い落とすべく、朴正熙大統領の暗殺事件を目撃したチョン・サンホを再度調査し、「チョン・サンホも事件の関与者である」との証拠をデッチ上げようとする。もともと、陸軍参謀総長の地位を剥奪する権限を持つのは大統領だけだから、チョン・ドゥグアンは何としても大統領からその裁可を得るため懸命の努力を続けたが、それに対する大統領の対応は？そんなチョン・ドゥグアンは一方では秘密組織ハナ会のトップとして君臨していたが、この隠然たるハナ会の実力とは？また、その力の源泉とは？

## ■強いのは誰？それは情報網の掌握者！■

古今東西を問わず、権力闘争と政治闘争は人の常だが、そこでは誰が強い？それを考えると、当然強力な軍事力を握っている者が強いことがわかるが、それ以上に権力闘争、政治闘争を勝ち抜くための重要な要素は情報収集能力、つまり情報網を誰が握っているかだ。ちなみに、豊臣秀吉が「中国大返し」によって明智光秀を「三日天下」にすることができたのは、誰よりも早く「光秀の謀反によって、織田信長死す！」との情報を入手したためだ。また、すでに3期にわたって大統領職を務め、今やロシアの独裁者として君臨しているプーチン大統領はKGB（スパイ組織）出身だ。

韓国の陸軍士官学校のシステムに不満を持つ多くの佐官級クラスの軍人と、現在のトップクラスの将校クラスの軍人たちの信頼を集めていたチョン・ドゥグアンはクーデター決行日を12月12日と定め、チョン・サンホ陸軍参謀総長の拉致やチェ・ハンギュ大統領の裁可の獲得等の計画を練ったが、その成否は？

日本の二・二六事件は不成功に終わったが、韓国では朴正熙による1961年の5.16軍事クーデターは成功した。しかし、今回のチョン・ドゥグアンの軍事クーデターの成否は？時々刻々変化する情勢を前に、将校クラスは一喜一憂を繰り返したが、さすがチョン・ド

ウグァンの信念はしっかりしたもの。チョン・サンホ参謀総長を拉致する過程で発砲事件が起き、「チョン・サンホ参謀総長の逮捕」というチェ・ハンギュ大統領の裁可が容易に取れない中、参謀次長兼戒厳副司令官のミン・ソンベ（ユ・ソンジュ）や国防部長官オ・グクサン（キム・ウィソン）らの動きは？さらに、チョン・ドゥグァンが立案した“ある作戦”によって動けなくしていたはずのイ・テシンが事態の急変に気づき、首都警備軍を動かそうとすると、それに対抗するべくチョン・ドゥグァンが取った対応策は？

朝鮮戦争は終戦したのではなく、あくまで停戦状態にあるだけだから、韓国は南北境界線上に「対北」のための強力な軍事を配備していたのは当然。しかし、今やそれを首都ソウルに動かしてでも、イ・テシンの首都警備軍を制圧しなければ……。チョン・ドゥグァンの権力欲にはいささか辟易するものの、彼の企画力と胆力、そして実行力はさすがだから、本作ではそれをじっくり堪能したい。さあ、悪玉チョン・ドゥグァンと善玉イ・テシンの対決は如何に？佐々木小次郎と宮本武蔵の巖流島の決闘は一瞬でケリがついたが、キム・ソンス監督が本作で描くチョン・ドゥグァンを首謀者とする軍事クーデターは、一進一退を繰り返しながら、“史実のとおり”の結論に辿り着くので、その姿をじっくり楽しみ、かつ勉強したい。

## ■□■嘘も方便！勝てば官軍！負ければ賊軍！■□■

2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻から、早くも2年半。欧米諸国の支援を受けたウクライナは懸命にロシアに対抗しているが、和平交渉は一向に進んでいない上、双方の人的、物的被害は拡大の一途を辿っている。一旦始めた戦争の和平交渉が難しいのは古今東西の常識だ。破竹の侵攻によって1812年9月にモスクワを占領したナポレオンは、勝者に跪く形でロシア皇帝からの和平団が訪れてくると思っていたにもかかわらず、それが幻だったことにあっと驚き、イライラする姿は、ハリウッド版『戦争と平和』（56年）を見れば明かだ。また、2023年10月7日のハマスによるイスラエルへのロケット弾攻撃から始まったハマス vs イスラエルの抗争も一向に和平交渉が進展しないが、そもそも長年にわたって不信任を抱き続けてきた両国（両民族）が和平のテーブルにつくこと自体、困難なことは当然だ。ちなみに、日本では、幕末から明治維新にかけて、長州藩と薩摩藩が大活躍したのは一体なぜ？土佐藩の坂本龍馬が「薩長同盟」に大きく寄与したことは有名な事実だが、関ヶ原の戦い（1600年）以降、徳川幕府の敵として位置づけられていた長州藩と薩摩藩が、なぜ京都の朝廷から“錦の御旗”を授かり、“倒幕軍”として堂々と江戸に進撃することになったの？何事も強い者や最終的に勝ったものが正義とされることのたとえとして使われる「勝てば官軍、負ければ賊軍」という言葉は、1868（慶応4）年～1869（明治2）年まで続いた明治新政府軍と旧徳川幕府軍との日本最大の内戦である戊辰戦争から生まれた言葉だが、その言葉の意味と深みをしっかり勉強する必要がある。

他方、本作に見る反乱軍（武装蜂起軍）のリーダーたるチョン・ドゥグァンがイ・テシンに対して見せる和平交渉は実に巧みだ。徹頭徹尾チョン・ドゥグァンを信用していないイ・テシンは、チョン・ドゥグァンがソウルに向けて進軍させた第2空挺旅団の撤退を公

言しても、それを一切信用しなかったが、イ・テシンに従うイ・テシン以外の軍人たちの対応は？

その意味では、誠実かつ単純明快なイ・テシンのキャラに比べて、チョン・ドゥグァンは複雑で臨機応変。そんな彼が「正直が絶対」と考えず、「嘘も方便」と考えていたことは、一旦撤退させると約束した第2空挺旅団を何の躊躇もなく再びソウルに向けて進撃させるシークエンスを見れば明らかだ。すると、昔から言われているように、戦争では、そして軍事クーデターでは、信義も公正も全く関係なく、勝てば官軍、負ければ賊軍なの？

## ■□■チョン・ドゥグァン＝悪玉 vs イ・テシン＝善玉が顕著！■□■

アメリカでは、2024年8月22日の民主党大会でハリス副大統領が来たるべき2024年11月の大統領選挙で民主党の大統領候補になることを正式に受諾し、受諾演説を行った。その言葉は美辞麗句に満ちていたが、所詮政治は権力闘争。それは2016年の大統領選挙におけるヒラリー・クリントン（民主党）vs ドナルド・トランプ（共和党）の対決を見ても、また、2020年のジョー・バイデン vs ドナルド・トランプの対決を見ても明らかだ。

また、来たる9月27日に投開票が決まった自民党の総裁選挙を見ても、9月23日に投開票が決まった立憲民主党の代表選挙を見ても、レベルこそ大きく異なるが権力闘争であることは同じだ。さらに、私が毎日楽しみに観ている『始皇帝 天下統一』（20年）等のTV放映されている中国の歴史ドラマを見れば、「政治は権力闘争」というれっきとした事実が2000年以上前から変わっていないことがよくわかる。そんな前提に立つと、権力闘争を勝ち抜くためには、さまざまな人間としての素養が不可欠であり、単なる“良い人”ではもちろん無理だし、“信念の人”だけでも無理だということがわかる。

しかして、本作では、キム・ソンス監督が最初から最後まで2人の主人公の対決として描く1979年の粛軍クーデター（12.12軍事反乱）の展開をスクリーン上で固唾を呑みながら見守る中で、2人の主人公の人物像、キャラをしっかりと確認したい。もともと、最初から最後までチョン・ドゥグァン＝悪玉、イ・テシン＝善玉と固定して描くキム・ソンス監督の手法に私はあまり賛成できなかったが、さてあなたは？

2024（令和6）年8月29日記